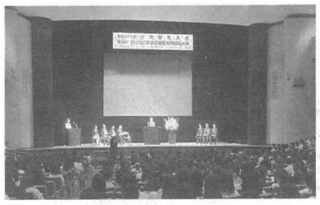

東京地区教研大会開催

東京地区教研大会 〝良質な教育を〟テーマに

第18回全日私幼連東京地区教育研究大会が7月24・25日の2日間、「『人生のスタートにこそ良質な教育を』～保育臨床の視点を大切に、保育の質を問いつづけよう～」を大会テーマに、東京・千代田区のよみうりホールと私学会館で開催され、永年勤続表彰、基調講演、分科会が行われた。主催は私学研修福祉会、実施は東京都私立幼稚園教育研修会（理事長＝加藤篤彦・武蔵野東第二幼稚園長）。ワークショップを交えながらの基調講演および対談の概要を紹介する。

対談

「幼稚園・こども園の『砂場』から幼児教育の質の向上を考える」

面白さをつない でいく子どもたち

武蔵野大学教育学部児童教育学科准教授　箕輪　潤子氏
東京都私立幼稚園教育研修会理事長　加藤　篤彦氏

現在、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構では、全ての幼稚園・こども園にある「砂場」に着目し、そこでの育ちについて実践事例を収集し、調査研究を進めている。対談では、砂場で遊ぶ子どもたちの映像を見ながら、子どもの育ちについて話し合われた。（文中敬称略）

◇

加藤　「砂場」という環境の中での育ちについて。

箕輪　幼稚園に園庭があることの意味、砂場で子どもたちがどのように育っているかを見ていこうということだ。全国24の園から、毎月映像と文字記録を送ってもらい、分析している。子どもの育ちのエビデンスとして使えたらと考えている。まず「ここは僕の遊び場」というタイトルの映像は、3歳で入園した4月の子どもたちの姿だ。

箕輪准教授

加藤理事長

加藤　映像では、3歳の子どもが横の子どもをたたいている。ややもすると、たたいてはいけないというところに視点が行きがちだが、「ここは僕の場だ」という子どもの視点と、両方の視点を持つことが大事だろう。次の写真は、年中児の5月初旬の様子で、砂場の真ん中に水を入れて、船で遊んでいる。言葉のやりとりができる子どもたちだ。それをおたまで遊んでいた子どもがいきなり、「僕に貸して」と言って遊びの中に入っていった。するとそれを見ていた別の幼い子どもが、アッ、アッと言いながら船を貸してほしいという意思表示をした。砂場を通して、子どもたちの育ちの具体的な姿が見え、共通の理解が見えてくる。そして映像によって保護者にも体感でき、子どもの環境の構成にもつながっていく。そういう視点が、カリキュラムやカリキュラムマネジメントにつながっていくと思う。

箕輪　100本近い映像を見たが、幼稚園によって砂場の環境も遊び方も違う。この映像の幼稚園では、剣先スコップを使えるのは年長児だけ。年中児はいいなあと見ながら自分のスコップで掘っている。なかなかうまくいかないから、年中児は熊手状のものを使ったり、工夫したりしていると、友達が水を運んできてくれる。そうやってその年中児は気持ちを立て直しながら掘り続けた。

加藤　条件が制約されているがために学べることがあると思う。

箕輪　その年中児は、周りに支えられ、掘り続けているうちに、夢中になって没頭している姿に変わっていった。

加藤　何かをやり遂げたいというイメージが持てたときに、何度も繰り返しながら、動きが洗練されていくし、多様な身体活動が啓発化されていく。

子どもの姿の根底に 常に楽しさがある

箕輪　次に砂と水の関わりについて。砂場に水を入れて、水をくんでくるのが楽しい子どももいれば、水で砂の道を作るのが楽しい子どももいる、それぞれが楽しんでいる。

加藤　水（のあるところ）と砂場との距離感にポイントがある。興味・関心が持続できる範囲内で、水が供給される必要があるということだろう。

箕輪　水を流すとき、樋や管を使っている園もある。水を管に流すと、中が見えないので、想像したり、管の水の出口にいる子どもに「流れた」と聞いたりしていた。考えることにつながっている。子どもは完成すると飽きる。ただ、管の傾きを変えたりしてまた遊びが始まったりする。多分、子どもは工夫して、面白さをつないでいくのだと思う。

加藤　自由に遊んでいる砂場のそういうシーンを大事に、環境構成をしていくと、面白い世界が待っている。砂場に枠を作って、部屋の前に砂場を移動できるようにしている園もある。

砂場の横に台を置くことで、子どもたちの育ちの様子が変わってくる。

箕輪　砂場は園それぞれに違っていて、育っているものもそれぞれ違うのかなと思う。

加藤　認知能力と非認知能力に分けられたとき、OECDは非認知能力を「社会情動的スキル」という言葉にした。教育要領では「学びに向かう力」とした。

箕輪　非認知能力ということでは、砂場には、自分の居場所としての安心感があったり、さまざまな感覚や身体の動きがあったり、試行錯誤や発見、気持ちの表現、友達の気持ちを理解したり協力したり、自然環境や偶然性もあったりと、さまざまな要素があると思う。さらに年齢によって見通し、目的、こだわりに向けて、継続していく姿が見られた。5歳児になると友達との関係で自分の動きを考えるようになる。そうした子どもたちのさまざまな姿の根底には、常に楽しさがある。

加藤　子どもが何をしようとしているかをつかみ、それにどんな願いをかけるのか、だからどういう環境構成をするか、何が育ったかを読み取る力（幼児理解）が私たちに求められている。

箕輪　こんなに砂場は面白かったのか、と協力園から感想を頂いた。これを機会に砂場に目を向けて、そこから育てていきたいこと、どんな環境・援助ができるかを考えていただけるとうれしい。

※全私学新聞幼稚園特集号に掲載されました（平成二十九年八月三日）